

# 建築の造形をささえた 京風の感覚

中村昌生

中世以降の建築を華やかに飾った細部に「**蓼股**」がある。蓼股を装飾の細部として発展させたのは**刳抜き式蓼股**の創始による。ほんらい荷重を伝達する強固な構造的部材であった板蓼股を、両脚のみ残して巧みに装飾の細部に轉身させたのであった。板蓼股に代って流麗な輪廓の**刳抜き式蓼股**を配することにより、どれだけ空間の構成を軽快に感じさせたことであろうか。やがてこの輪廓のなかは、装飾彫刻で充たされるようになる。

こうした**刳抜き式蓼股**は、11世紀の京都の建築に登場したものであった。社寺建築においてこのような細部を創り出す感覚は、のちの数寄屋造りのそれに通じるもののように考えられ、いかにも京都らしい発想のように思えてならない。

また京都の平安時代の建築には、**小組格天井**が現れた。これは**組入れ天井**に比べて、いかにも繊細な造形である。また**寝殿造り**の住宅には、**蓼戸**が使われた。そして**蓼戸**は社寺建築にも活

用されたし、屋内では**格子戸**や**菱格子**がよく使われていた。こうした諸要素は、**やがて中世の和様建築**において、特に**京都系のデザイン**の特色ともなったものである。京都系の和様は、奈良系のに比べて、どことなく、軽快であり、繊細であり、雅びな感覚を漂わせる。

京都の町屋は、日本の町屋の模範ともいえる**きデザイン**をつくり上げた。その特色はいくつもあるが、やはりまず**ファサード**を形づくる「**むしこ窓**」に「**京格子**」が注目されよう。

大屋根と庇との間の余り高くない壁面に連なる**むしこ窓**は、いうまでもなく**塗籠**の**格子窓**である。防火構造としての**塗籠造り**は各地の町屋に発展し、立派な土蔵造りの町屋も姿をあらわした。そうしたなかで京の町屋の**塗籠造り**は、はなはだ軽快であり、東京とは対照的である。今井町の今西家と比べても違いは大きい。京の**むしこ窓**は、**塗籠**といいながら、それは窓の部分だけであって、両端と入口の柱は壁面にあらわれている。間口が広ければ、さらに中間は柱をみせて壁面を分割し、その間に**むしこ窓**を配するのである。柱間を長くし、散りを少なくしただけで、所詮は真壁である。

**塗籠造り**である**限り柱**はもちろん、**軒先**まで被覆されなければならない。そこまでやらずに適度に柱をみせ、ほどよく**塗籠造り**をあしらったという感じである。こうすることによって、土蔵造りのような重厚で、いかつい**ファサード**に陥ることを巧みに回避したのである。**塗籠**の擬態であるといつてもよいかも知れない。さきに述べた**蓼股**の工夫と通じるところがあろう。

庇の下の**京格子**は多彩である。職種により、内部の座敷に応じさまざまな**格子**の**デザイン**が工夫されている。繊細な**細目格子**のようなもの

から、木太い米屋の**荒格子**のようなものまであって、木割もいろいろである。しかしそれらはやはり何れも**京格子**としての風格をそなえている。

**格子**ほど不思議なものはない。そしてつくる者にとってこれほどむつかしく**神経**を使うものは少なからう。**格子**の**寸法**とその**あき**の僅かな差異から、多種多様な表情と**雰囲気**が生まれるのである。ほんとうに**格子**は**魔**ものである。京の**町屋大工**は、いつの頃からか、この**格子**の**デザイン**を磨き上げた。そして**京風**をつくり上げたのである。東京の**格子**も優れている。繊細さという点では、東京の方がまさっており、**柳障子**を思わせるような精巧さがある。仕事ぶりにも**指物師**的なきめの細かさがみられる。この点は東京の**普請**の特色ともいえよう。京**格子**はそういう**東京風**とは少し趣が違っている。その違いが生じる基本的な要素は、やはり**寸法**にあると思う。寸法の決め方に**京風**のコツがあると思われる。

京の町屋の敷地は細長く、家は奥深い。片側は長い通り庭がはしる。通り庭の奥の部分は必ず吹抜けて**屋根裏**は露出する。その部分まで二階をつくることは断然しない。屋根裏には**天窓**があげられ、**ガイドコ**に貴重な採光を導入している。また家屋の所々に**天空**の見える**坪庭**がとられるのも町屋の特色である。軒を接して建て連なる町屋にとって、坪庭はなくてはならない**大空**への吹抜けである。猫の額ほどの坪庭でも、それが生活に機能するところは絶大である。連続する暗い部屋に**明かり**を与えるだけでなく、閉じこめられた人の**眼**や心に**自然**のみずみずしさを供給する。町屋に住んできた人たちは、こうした吹抜けの重要な価値を深く体験してきた。そして彼らはそこにも適切な**デザイン**を工夫し

てきたのである。

京都は、茶の湯の文化とともに数寄屋造りの発生地であり、育成地であった。利休の道統を継承して連綿と活動が続ける茶の家元が今日まで存在し、茶の美術工芸に従事する作家、工房も活動が続けてきた京都である。種々な芸能とともに茶の湯も嗜み修める人が多く、茶室をもつ家も少なくない。当然のことながら茶室の建築技術は発達し洗練され、名工も養成されてきた。しかし茶の湯の影響はそれだけではない。茶の湯の心構えや造形感覚が、日常の生活に溶けこんでいって、京都人の暮しぶりを支え、洗練さを加えたのであった。京都人の暮しぶりから茶の湯が生れたのかと思えるほど、そこには茶の湯らしい心意気がかよっている。そうした京都人の生活が土壌となって数寄屋普請が発達したとみることができる。

町屋は数寄屋造りというべきではなからう。しかし、かのむしこ窓の扱いなど、数寄屋造りのデザイン原理と一致している。道沿いに設けられる駒寄せ（犬除け）も、実にさまざまな趣向が凝らされているが、それらはほとんどが数寄屋造りの仕様に成るものである。数寄屋造りのデザインの基調が京都の在来の家並みを支配しているといって過言ではなからう。

数寄屋普請は大正、昭和戦前にかけて一層進展をみせた。富豪や数寄者による別荘の建設がその傾向を促した。数寄屋造りは江戸時代以来の伝統をうけ、東京でも発達を遂げていた。しかし東京と京都では、その持味が少し違っていた。そういう違いが、東京を中心に現代数寄屋とか新興数寄屋を戦後において大いに普及させる基盤になったのであろうか。

京都では、そうした現代数寄屋の受容に積極的

な姿勢は示されなかった。戦災は免れ、新築が少ないせいもあったろうが、旅館、料亭でも東京の作家を招いて現代数寄屋を建てたのは、つる家（吉田五十八氏）、炭屋（堀口拾己氏）くらいでなかろうか。個人の家では、北村邸（吉田五十八氏）が知られている。しかし現代数寄屋の流入が全くないわけではなく、直接有名作家によらなくても、地元の設計者や技術者を通して影響はかなり及んでいる。だが、桃山時代以来の茶の湯の文化を背景に根をおろした数寄屋普請の伝統と、京都人の造形感覚は、やはり現代数寄屋をそのまま歓迎しようとはしないのである。職人の技術も、北山丸太などを扱うことに手慣れていて、材の自然の持味を生かす数寄屋本来の技法を受け継いでおり、それを躍動させるデザインを求める気持ちを秘めている。

ここに引いた例だけで、京都の伝統的な造形感覚を説明し尽くすことは、もちろん許されなけれども、こうした造形の根は、今日の新しい京都の建築にもいろいろな形で受け継がれていることは否めない。都心部の町屋はほとんど元治の兵火に焼けて復興された建築であり、それらは近年はげしく建て替えられつつある。もはや在来の姿は踏襲する人は皆無で、瓦屋根の町屋は刻々消えていく。しかし同じ京都人の建て替える建築には、材料や構造形式が変わっても、前記のような特色の再生をしばしば見うけるし、公共的な各種の施設においても同様の現象が指摘できると思う。最近の風致や景観の維持のための法的規制や行政指導もこうした京都の伝統を将来に生かしていく上に機能しはじめている。

（京都工芸繊維大学教授）